

GODENA ANGEL

コードネームは

二次元ぷち文庫

天使

エンジェル



2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

舞麗辞

表紙イラスト: 秋月からす

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『コードネームは天使』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



コードネームはエンジェル

天使

舞麗辞

表紙 / 秋月からす

登場人物紹介

Characters

エンジェル

凄腕の女スパイ。クローン研究者の抹殺と研究の成果の抹消を依頼された。

クローン兵

人間を超越した戦争のための兵士。異常な生命力でエンジェルに襲いかかる。

ドクタージェームス

クローン研究の権威とまで呼ばれた研究者。

真夜中。直線道路を闇色のバイクが疾走する。旋風のように走り抜けるそれを駆るのは、一人の女だった。

まだ年若く、せいぜい二十代前半といったところか。夜と同じ色をしたラバーのライダースーツに包まれた肉体は、銀幕を突き破ってきたかのように不自然なほど均整のとれたスタイルを有している。

大型二輪に跨がっているので正確なところは分からないが、身長は高く百七十センチ前後か。おかげで女だてらにハレーに跨がる姿も絵になつていた。

時速百キロは軽く出ているはずだが、女はメットをしていない。長く、曇りのないブロードヘアーが摩擦風に煽られて真横へとなびき、春の綿毛みたいに柔らかな曲線を描いている。汗のせいか朝露に濡れたみたいいきらきらと輝いており、闇の中でもなお明るい。月より映える頭髮は、さながら本物の黄金のように鮮やかだった。

肩からは弾倉ベルトを袈裟懸けにし、その腰には全長一メートル弱のマシンガンが黒光りにするその姿はさながら六十年代SF映画のヒロインを髣髴とさせる。

事実これまでにすれ違った何人かのドライバーや歩行者らは、映画の撮影だと思い込み近くにあるはずのカメラを探していたほどだ。

直進する先には、危険・この先行き止まりの立て看板。女はそれを避けるでもなくタイヤの先で吹き飛ばし、アスファルトの続くその先を目指す。

やがて舗装道路は終わりを告げジャリ道が続き、それをも越えようと既に道と呼べるものさえない雑木林へと突入する。それでも女は決してバイクの速度を緩めはしなかった。むしろアクセルを開きっぱなしにし、代わりに重心を下げるように頭部を低く屈めた。

前方を睨みつける女の瞳は地中海の水面を思わせるコバルトブルー。鼻梁は高く、鋭利な顎のラインは鋭いナイフを連想させた。

しかし同時に長い睫毛に彩られた瞳とジェリービーンズのようにふつくらとした下唇はどこまでも女性的で、ニンフのような甘い魅力を宿している。身に着けているのが赤いドレスであったなら、パーティの主役を張れる淑女といった趣だ。

鋭さと柔和さ。相反する二つの印象を、女は同時に内包していた。

バツ！ それまで深緑に覆われていた視界が唐突に開ける。ところがそこに待っていたのは断崖絶壁、しかもビル十階程度の高さはある。

「さあ——シヨウタイムといきましょうか」

女はフツと微笑すると、更にアクセルを噴かせる。

ガッツ!! タイヤが地面を蹴りつける。その瞬間、助走をつけた二輪が祝砲のように天へと打ち上がった。月夜に空を舞う女ライダーのシルエットが、星空の中で鮮やかに浮かびあがる。

しかし無論、バイクに飛行能力などない。重力に引かれるまま、鋼鉄の獣を駆る女は放

物線を描きつつ次第に崖下へと墜落してゆく。

落ちゆくその先には一軒の建造物が待ち構えていた。何かの公共施設のようなその建物の天井には三メートル四方の天窓があり、うっすらと光が滲み出している。そして女は、そこに狙いを定めるようにしてハンドルを微調整しつつ落下してゆく。

「三……………二……………一……………GO!!」

パライイイイイインツツ!!

女のカウントが終わると同時に、研究室の天窓が突き破られた。割り裂かれたガラスの破片が、電のごとく室内へと降り注ぐ。

三階建てほどの高さながら、建物の中は吹き抜けになっていて恐ろしく広かった。この建造物はほとんどが、この一室に占められているようだ。

そんな広大な室内には見渡す限りようと不明な機械とそれを繋ぐ配線、青白い光を放つモニター類が敷き詰められている。そしてその隙間を縫うようにして、二十人ほどの男が立っている。男たちは全員が全員陽に当たったことなどないように顔色が悪く、白衣を身に纏っていた。

ズズギギギギイイイイツツツ!!

「ぐぎやがががあああああつあつ!!」

落下する鋼鉄の黒獣がその一人の顔面を強襲し、血しぶきと断末魔の叫びとを上げなが

ら盛大に倒れ込む。横倒しになったバイクのヘッドライトが中空を照らす。

その光をスポットライトのように浴びながら。ブロンドの女は室内へと舞い降りた。

タンツ。屈み込むようにして降り立つ。流麗なブロンドが翼のように舞い上がり、薔薇を煮詰めたような甘い香りが男たちの鼻腔を擽る。着地の衝撃で大きく開いた胸元の白い谷間がプルンツ!! とマシユマロのように柔らかそうに飛び跳ねた。

ギユツと床すれすれまで落ち込んだヒップはまさに桃尻と呼ぶに相応しい見事な逆ハート型で、今にも艶やかなライダーズーツを引きちぎってしまいそうなくらいパツパツに張り詰めている。男たちの視線は否応なくその胸と臀部、湖のような瞳の奥へと吸い込まれていった。

「ハローみなさん——こんな時間までお勤めご苦労様♪」

隣近所に挨拶するような気安い口調で、ブロンド美女が手を振った。仲間の一人が倒れているにもかかわらず、男たちは女に見とれるあまり動けない。

とはいえ男たちがあつけにとられたのも仕方がないだろう。なにしろ刺激的なコスチュームに肢体を包んだ金髪、碧眼の美女が突然天から舞い降りてきたのだ。そんな夢みたいな出来事にすぐさま順応しろというのがどだい無理な話であった。

間抜け面を並べる彼らを見回しながら、蒼い瞳の女は更に言葉が続けた——携えたマシンガンを構えながら。

らうわけにはいかない——まあ、お父さんたちもあつちで待つてるから寂しくないわよね」
憐憫の入り混じった瞳で水槽内の巨人を見ながら、女はその額へと銃口を向ける。

そして引き金に指を——掛けようとして、慌ててマシンガンの矛先を横へとずらした。

「誰ッ！　そこに隠れているのは分かっているのよッ!？」

水槽の脇、小さな灰色のボックスの裏に狙いを定めキツい口調で詰問する。

しばらくして、機械の裏側から一人の男が両手を挙げたままゆつくりと立ち上がった。
姿を見せたのは三十代中盤と思しき青白い顔をした男、蒼眼の女は見覚えがあった。

「あら、あなた——ドクタージェームス、こちらの所長さんね？」

銃口をその額へと構えながら柔らかな声で女が問いかける。薔薇を煮詰めたような甘い
芳香が男の鼻腔を擦った。

「……いかにも。私がこの国際生物研究所の所長・アントニオジェームスだ——しかし
キミ、ヒトに名を尋ねるときはまず先に名乗るものだよ」

白衣の男は服従の姿勢を保ちながらも、挑発的にそう返してくる。

「それは失礼しましたわミスタージェームス。わたしの名はエンジェル——言うまでもな
くコードネームですけど、この際本名など不要でしょう？」

「エンジェル——ふむ、政府の最重要機密にのみ携わる凄腕の女スパイが確かそんなコー
ドネームで呼ばれていると聞いたことがある。だとすると——イヤハヤ私も偉くなつたも

のだ。キミのような名人に付け狙われるとはね」

言いながら、男は口端をほんの少しだけ歪める。ほとんど表情は変わらないが、どうやらそれが彼の笑い顔らしかった。

「わたしもお会いできて光栄ですわ。二十一世紀最高の科学者、クローン技術の権威と呼ばれたあなたに——もつとも、今は単なるお尋ね者ですけど」

言いながら、天使の渾名を持つ女は軽く天を仰いだ。

「心外だな。ヒトを超えたクローン兵の開発はキミの依頼主……当局直々の要請で始めた研究だ」

「でしたら半年前、研究の打ちきりを通達されたとき素直に従うべきでしたわね。この国はもう戦争のための兵士など必要としないのですから」

黒い天使は冷ややかな言葉を浴びせかける。

確かに——この数年、某国と泥沼の戦争状態にあった政府は膨れ上がる戦死者数に頭を悩ませていた。そこで起死回生の策として立案されたのが、クローン兵士の開発だ。研究は秘密裏に行われ、その責任者に選ばれた者こそ目の前にいるドクタージェームスそのヒトであった。

研究はジェームスの天才的頭脳もあって恐ろしいほど順調に進んだ。もうほんの少しで、戸籍のない、いくら死んでも遺族を生まない、死ぬために生きる理想の兵士が誕生するは

ずだったのだ。

しかし半年前、長い戦争は歴史的和解によってピリオドを打つ。そうなると政府にとって恐怖すべき対象は他国ではなく、むしろ自国の野党へとシフトした。

クローンの研究は医療目的でさえ根強い反対論がある。もし政府が兵士の複製など計画していたと知れたら——首脳陣は大いに怯えた。

それに追い討ちを掛けたのは研究者たちの裏切りだった。クローン兵開発に携わっていたジェームス以下三十人の研究者らは政府の命に背き、戦後も密かに研究を続けていたのだ。

そこで政府の下した決断は——「すべてを無に還す」。そしてその幕引き役に選ばれたのが彼女、政府の暗部を司るS級エージェント・エンジェルであった。

「私にはむしろキミの提言こそ理解できないね。我々は研究者、知恵の実を口にしたエデンの追放者の末裔だよ？ 手を伸ばせば届くところにある果実を、どうして諦めることができる？」

男は専門家特有の、神経質かつ熱っぽい口調で力説する。対する女はそんな彼を哀れむように小さく頭を振った。

「だから茨の道を歩まねばならなくなつたんですよ——アダムも、イヴも……そしてあなたたちもね」

相変わらず四つんばいのために天に向けて掲げられた牝尻の間では厚手のクロッチが念入りに溶解され、その内側からは紅色の肉華が綻び咲いていた。

薔薇の花弁を思わせる陰唇も美しい女の象徴は既に濡れていた。それが化け物の粘液によるものだけでないことは、当のエンジェル自身が知っていた。

「ううっ……この、化け物めええ……!!」

感じてしまう自分から目を背けるように怪異へと憎しみの蒼眼を向けるも、怪物がそれを意に介するはずもない。

化け物は当然のように、いくつも開いたスーツの裂け目から無数の肉ツタを潜り込ませてきた。先ほど布地を焼いた粘液が潤滑液代わりとなり、卑猥な肉按摩を手助けする。

にゆるつにゆちゆるつぬるるうううっ……。

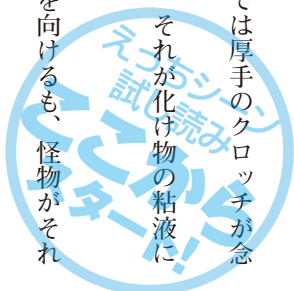
「くっ……うっ……んうっ……んうふあっ」

醜い化け物の行為とはいえ、その動きは下手なオイルマッサージなど及びもつかないほど巧みで、そしてどこまでも淫らだった。抑えても、甘い声がついつい漏れてしまう。

「ふああっ……あっ……あうっ、くううっ……んひつあああっ」

根元からとぐろを巻くように絞り上げられた乳峰は風船のように膨らみ、肉糸はピンツと硬くなった桜色の乳突起にまで捕食するように絡みつく。

肉糸がそのままゆるると扱き始めると、乳先がショートしたみたいに桃色の快楽電流



がバチバチと弾ける。乳豆へと急速に血液が流れ込み、突起はびくんびくんと飛び跳ねんばかりの勢いで力強く勃起してしまう。

「うやあつ……ちつちくびいっ……そんなっ、やりかたああ……んんっっ」

痛いのに気持ちいい、キツイのに柔らかい——極細の綿糸で縛られるような感触に、天使は桃色の唇をわななかせせる。

下半身では更なる陵辱が彼女を襲っていた。溶解された股布部分から侵犯した肉塊は股座全体を飲み込むようにべちゃりと張りつくと、その内側に数えきれないほど微細な肉触手を産み出して女陰を隅々まで貪っていた。

うじゆるうじゆるっっ、うじやうじやうじやああ!!

「あひいっ!! やつやめなさいよっ……んぐひいっそれやだっ、ひあやつらああっ!!」
柔らかな肉で陰裂をブラッシングされているかのような感覚に、天使はあられもない悲鳴を上げてしまう。

それは人間相手のセックスでは決して味わうことのない、人外の快樂だった。怪物は女の反応に気をよくしたかのように、その行動をエスカレートさせてゆく。

微細な触手によって陰核包皮は剥き取られ、ピンクの肉真珠が容赦なく磨かれる。

くちやくちやくと快樂中枢を咀嚼するような腐肉の蠢きに、桃色の閃光が股間をズシンと刺し貫いた。

膣口には数えきれない肉ブラシが潜り込み、ぐちゆりぐちゆりといやらしい水音をかき鳴らしながら肉壁を押し広げ、更なる仲間を呼び込んでゆく。

大人の拳が入りそうなほどの大口を開かされた肉穴は痛みを感じるどころかジンジンと甘い痺れを繰り返すばかり。それどころか膣道で蠢く化け物肉の摩擦に、キュンキュンと膣を食い締め応えてしまう始末だった。

（ううっ、なんてザマなのッ……わたしはプロなのよっ、こんなモノ相手に……感じてッ………うう……ああっ、でもこいつっ……なんて、上手なのオッ……!!）

歯軋りをして襲い来る快感に耐え忍ぶも、肉アメーバは女の感じるところを知り尽くしたような動きで敏感粘膜をじつくりと責め立ててくる。

「あはっあっあっああやああ……んはあんっ……んいつ……きひいいいつ……!!」

粘膜だけではなく、内股や脇腹、臍の窪みなどにも触手は侵入し、舌のようにぬらぬらとした表皮で神経を逆なでして牝に休む暇を与えない。数えきれないほどの男に全身を舐めしゃぶられているかのような刺激に、ブロンドの女スパイは始終甘い悲鳴を上げさせられた。

にゆるんっにゆるっるりゆりゆううっ……にゆちゆぶりゆんっ!!

全身をくまなく肉が這いずり回り、淫らな粘り音が鼓膜を塞ぐ。まるで自分の身体を飴玉にでも変えられて、巨大な口の中で舐め転がされているかのようにだ。身体中で快感が弾

け、指先から蕩けてしまいそうになる。

つぷうつ!!

「あふあつ!! んっひいつむねっいやあつ……!!」

乳先を襲う肉糸の一本が、その先端で乳突起上の窪みを穿った。鋭い痛みには呻く間もなく、肉先はぐりぐりと窪みをほじくり返してゆく。

肌を愛撫されるだけで切なくさせられてしまうのに、ここにきての粘膜への攻撃は肉拷問と違っていいほどの凶悪さだ。痛みを乳峰へと分散させ甘い乳悦へと書き換えてしまう。

ぐちゅっ、じゅちゅっ、ぐちゅるうつ……ぬぷっ、ぬぷぬぷりゅんっ!!

「んうぐうつ、あひやあつひいやああ……あはああんっ!!」

肉ブラシを頬張らされた子宮は薪をくべた釜のように熱を増し、ひくつく膣穴からはとめどなく女蜜が溢れ返って床に甘酸っぱい香りの水溜まりを生んだ。

口はもう甘い淫声しか発することができない。身体中の汗腺が開き、肌は茹であげられたみたいに真っ赤に染まっている。よほど体温が急上昇したのか、地を這う天使は甘い牝臭の籠った湯気まで立ち上らせていた。

「んあつあつはああ……だ、めえっ……これ以上はもううつ、もううつ……!!」

絶頂の予感に、天使は尻を左右に激しく振って再度の抵抗を見せる。しかし尻をがっちり抱え込んだ肉塊はその程度ではびくともしない。それどころかビクビクと収縮を繰り返

返す牝穴の動きに獲物の限界が近いのを感じ取ったか、ますます激しい抽送で陰裂を割り裂き子宮口まで刺し貫いた。

ぐちゅずぶりにゆるりいいいい——ツツ!!

膣粘膜をえぐりとするほどの激しきで幾千の肉糸が膣道内をみっしりと埋め尽くす。その凶悪な突き込みは、絶頂間際の牝を墮とすには充分すぎる仕打ちであった。

「いつひいつ、いつイクううう————ツツ!!」

ビクンツ！ ビクビクウウツツ!!

顎を仰げ反らせブロンドを振り乱し。淫らな天使が吠え立てる。その瞬間、快楽が子宮の底で破裂し、喜悦が雪崩を起こしたように女を内側から飲み込んだ。

身体中の肌が粟立ち、開ききった汗腺から甘酸っぱい牝ホルモンを含んだ汗がどつと噴出す。ギューウツツ!! と収縮した膣口からは魔肉との僅かな隙間から牛の唾液みたいに白くどろりと粘ついた牝汁が糸を引き床へと垂れ落ちた。

頭から足先まですべての神経が甘く蕩け、表皮の薄皮を剥かれたみたい敏感になる。果てながら、尻に憑いた化け物肉の生暖かな感触だけでまた小さなオルガスムが弾け、天使はぶるりつと黒桃を震わせた。

「んあはあつ、はああつはあああ………」

全身を突き抜ける絶頂快楽がようやく治まった後も、エンジェルはしばしうつぶせのま

豊満な乳房を飲み込むや、魔性は先ほど以上に容赦のない搾乳を始める。乳峰全体を完全に包み込んでの肉按摩はその濡れ肉のおぞましい感触も相まって、齒のない口で齧りつかれてでもいるかのようだ。

「んいい…むねっ…あっうあはっあはあんっうっ…うあっそんなっすわっ吸っちややあ…あああんっつ!!」

下半身への刺激だけでも堪え難いほど狂おしいのに。そこへ乳悦まで流し込まれて、天使は更に激しく鳴かされる。

「随分と嬉しそうな声を出すな…ヒトの女は皆そんなに淫乱なのか？」

腕の中の淫らな獲物に興奮したのか、男はニヤニヤと笑いながら更にピッチを上げる。

ジュブツズブツズブルップズヌプヌプヌプウウウ——ツツ!!

「んふいあっ、だめへえっ! こあれうっ、壊れちゃううっ!! こんなものんひいひいっつ!!」

喉まで貫かれそうな剛直の姦通に、黒い天使はバサリバサリとブロンドを振り乱し喘ぎ鳴く。息苦しいのに気持ちいい。酸欠状態の頭の中が快感でジンと痺れ、開きっぱなしの唇からは絶え間ない喘ぎ声が溢れ続けた。

「あっ、はああっ、あんっあんっ、あはあんっつ…んーあはあっ…あひいっ!」

乱れる女の姿に触発されたのはクローン兵だけではなかった。胸に食らいついていた化

け物肉もにわかには活性化する。脇腹を舐めながらまたもや牝腰へと流れ、やがて硬質な床にひしゃげていた天使の柔桃までをも侵食してゆく。

「ふあっ…はああわあ…：…いやっお尻っあはあっん、くすぐっ…：てるっう——!?!」

菊座にへばりついた水っぽい感触にブロンドが呻いた。排泄孔を舐め回すような感触に桃肌がザッと粟立つ。

腐肉はぐちゃぐちゃと気味悪い音を立てながら、薄紅色の放射皺を押し捏ねる。初めは様子を窺うように優しく、次第に大胆に——何度も何度も肛門を突いてきた。

「あはあっ!?! 舐めてっ舐めてるうっ、そんなっ…舐めっ、やめろおおっつ!!」

化け物肉の責めは菊座を舐め回されているかのようで、堪らなくおぞましい。しかし同時に、敏感粘膜を舌のように柔らかな肉で愛撫されるこそばゆさの中に背骨を痺れさせるような恥悦が滲んでいするのも事実だった。

くちつぬちつくちいくちい…。

粘液を塗布するように括約筋を按摩しながら、そのたび魔肉は侵入の度合いを深めてゆく。やがてヒリッと染みるような感触が肛内で瞬き、ブロンドが飛び跳ねた。

「うひっ、なっ…は、いるのっ、入る気なの…：…そんなどこにっ!?! やっ、バカバカやめなさいよこの変態っ、さっさと地獄に行けエエツ!!」

魔性の企みに気づいた天使は必死に括約筋を引き締める。だが言うまでもなく、今現在

彼女の膣道は腕より逞しい牡根に占領されている最中だ。

尻孔を閉ざせば必然的に、その凶悪なペニスを食い締める羽目となった。

「あいひぎゃあはああはああんっ!？」

火花を散らさん勢いで抽送を繰り返す火掻き棒に粘膜をこそがれて、ブロンドのスパイは白目を剥いて吠え立てる。

瞬間、菊座が柔らかに弛緩した。それはほんの一瞬、エンジェルはすぐさま肛門に力を込め直した——しかし、遅かった。侵入の機会を今か今かと窺っていた魔物は訪れた好機を逃さず、一気に直腸内へと雪崩れ込む。

ずんにゆぶちゆぶちゆるるちゆぶちゆりゆうううつつつ!!

「きゃあわはあっ!!」

排泄物が逆流してくるような感覚と、肛門粘膜を焼き払うような凄まじい熱が排泄孔を襲う。あまりの熱さに気を失いそうになる。

怪物が直腸内部を進むのがはつきりと分かる。魔物に体内を擦られるのは刷毛で擦られているみたいにくそばゆい。前後の秘門をほじくり返されながら、天使は泣き笑いのような表情のままひたすら意味不明な喘ぎを上げ続ける。

「うぐうっ……んうあ……ぐっ……そ、おんな奥、までええ……おおっ……んおほおああっつ!!」

肉塊はなおも直腸深くへと侵犯を続けるが、肛門をいたぶる熱や痛みは波が引くように治ってゆく。しかし本当に辛いのはここからだつた。

にゅちつちゅぷにゅぐにゅぐにゅぐうううう……ぐにゅつぷぐにゅぷにゅつるう……。「んふあつほあつあおふあおおおんつ!? んひつおひいっおしりがああつっ!」

業火を割って湧き上がったのは紛れもない肉の悦びだつた。怪物を頬張っている腸管がうずうずと騒ぎ、尾てい骨を溶かすような鈍悦と肌を擦るような被虐感が巨桃を覆う。(わつたしお尻で感じてるうっああっこんな状況でっこんなになんて乱れてるうううっ!!)

任務のために数えきれない男たちと夜を共にしたエンジェルだが肛交は未経験だつた。初めて知る尻穴快楽に戸惑う天使。しかし充分爛熟したその肉体は与えられる新たな悦びに順応し、開ききつた肛門はもつと多くの肉を貪ろうとひゅくりひゅくりと卑猥に蠢く。「しりっおしりいっいっ!! すごっこれすごいひっ!! んほおああつっ、あつ、ひああっ、んふおおお……ぎやあああああつっ!!」

ズヌギイチイッ!!

天を打ち抜くような絶叫がこだまする。肛辱の間腰を休めていた巨人が、再びペニスを動かしたのだ。久方ぶりの肉楔を打ち込まれ、牝天使は水揚げされた魚みたいにビクッと激しく飛び跳ねる。

しかし男は構わず、むしろその息の根を止めようともいうように激しい突き込みを再

開した。

ズブルズブルズブルズぎぬぎぬぎぬぎぬにゆずぬぬりゆううつつ!!

「ほおごおおおあおわつつふかつ深いひいいつつつ!! 壊れつこあれうつあたひいいついやつこわしちやあはあんついやつこわしちややだあああんつつつ!!」

まるで女性器を破壊しようともいうようなまるで容赦のない挿抜に、囚われの天使はプライドも体面もかなぐり捨てて泣き叫ぶ。

ただでさえ凶悪な牡棒、しかも今は先ほどと異なり直腸にも悪魔を飲み込んでいるのだ。圧倒的な圧迫感が下腹部を支配し、肉体どころか女の精神まで破壊してしまえうだ。

それも痛みであればまだ我慢できたと思う。しかし膣道を引き裂き子宮を破裂させようという魔根の突き込みにさえ、今のエンジェルは喜悦以外の感覚を味わうことはできなかつた。

「あひやあつ、んほつほおあおつぐひいいつつんツ! おつ、ふおおおんつつつ!!」
膣で爆ぜる峻烈な喜悦と肛門で味わう鈍い肛悦。その狭間に押し潰され繰り返し揉みくちゃにされて、蒼眼のスパイは次第に何も考えられなくなる。胎内と体内、二つの穴を交互に交互にほじられて、そのたび喉からはキーの異なる淫声を搾り取られてしまう。

初めは相手を虜にしてやろうと画策していたはずの彼女自身が虜となり果て、今や重い尻を上下に振りたてて一心不乱に剛直を貪っていた。

「そろそろ頃合か……さあ、孕んでもらうぞ——俺の子を」

牝の乱れように頃合と感じたのか、それまで黙って膣肉を齧ることだけに専念していたクローン兵が小さく言葉を発した。同時に、既に子宮まで届いてる長大な男根をより深く押し込まれる。

ぎゅちゅるぷううぶぱつ!! ぐにやうにゆうにいりゆうう……!!

改造男根はまたいくつもの細肉へと分かれ、触れあう受精器官へわらわらと群がつてゆく。そして程なくして、子宮の入り口あたりに砂糖にたかる蟻の大群みたいに集まった。

ぐにつ……ぐにつぎゅちゅにゅにいいいい……!!

「はっひいいっ!! ひはあっおなかつアソコオオツ!! なっ、ひらっ、開かれてっいいっひいいっ!!」

胎内で生まれた衝撃にブロンド美女が裏返った悲鳴を放つ。子宮を、子宮口を、無数の肉糸でこじ開けられている——信じられない感覚に目の前が真っ白になる。

本来であれば痛みを伴うはずの常識離れた陵辱であるが、散々快感に翻弄され続けた女体にはそれさえ痛烈な喜悦となつて脳髓を蕩けさせた。流し込まれる快感があまりに強くて、頭の下側がズキズキと痛いくらいだ。

歡喜と狂気の狭間を彷徨う天使の股をより大きく割り開いて、巨人は更に腰を迫り出す。ぶちゅりゅぶちゅぶにゆるうっ!!

「ふぎゅっんんういいい……いっなかああ……おなかっ子宮のなかっあはっ、か、嚙んでるうう!! やだっおなかやらったべちやらめええ!!」

胎内で不気味な音が弾け、同時に子宮口に噛みつくような痛みが走る。子宮内部へと潜り込んだ肉糸はその内壁へと癒着し、輸精管と子宮を完全に結合したのだ。

そんなことなど知る由もないエンジェルは子宮を食らわれるような錯覚に舌を突き出し唾液を撒き散らして悲鳴を上げる。しかし同時に、目の前の怪物が自分を確実に受精させる下準備を済ませたことだけは、子宮の疼きで悟っていた。

「一滴残さず注ぎ込んでやるぞ——一度で間違いなく、孕ませてやる」

男の囁きに、組み敷かれた天使はブルツと身を震わせる。汗にまみれた豊満な媚肉がぶるんつと躍る。

「いっいやぁ……ゆるして……」

悲鳴でも咆哮でもない。震えるような怯え声が初めてエンジェルの口から漏れた。

(怖い、怖い、こわいこわいこわいこわいこわい——!!)

レイプされても、妊娠させられても墮胎すればいいハナシ——そうたかをくくっていたものの、こうやって受精を確信させられるとどうしようもない恐怖が胸に去来する。

しかし恐怖しながらも肉体だけは発情しきり、牡の子種を今や遅しと待ち侘び疼き鳴いていた。膣肉は女の思いなど関係なく、ひとりでにギユツと牡根を食い締め放精を促して

しまう。

「クク、そんなことを言いながら、お前も肉体では受精を待ち望んでいるようだな——ぐつ、出すぞ……おとおつ!!」

男の言葉が呻きに変わり、そしてペニスが爆ぜるように飛び跳ねた。

どびゅうううううつ!! だばびゅうるつビュばびゆりゆつびゆばぶつばびゅうつばびゆううう——ツツ!!

「んきやああああつでっ受精してうっ熱いいいつつ!! いやっお腹の中焼けるうぐつひいいつつ、だつめえええつイクツイクのオツ!! 射精されてイクウウウ——ツツ!!」

子宮に向けて発砲されたかと思うくらいの凄まじい射精に、天使は火炙りにされた魔女のようにもがき、仰け反り、飛び跳ね、暴れまわる。

しかしそんな業火までもが媚粘膜に浴びては堪らない肉の悦びへと姿を変え、女を否応なく絶頂へと打ち上げる。

どびゆぶしゆるつびゆしゆるつぶばつぶびゆばびいりゆぶゆるうんツツ!!

「あはあつザーメンとまらないいつ!? ゆつゆるしてえっ…もおむりつ、おなかのなかあ…もおはいらないいいい………つ!!」

子宮は既にギチギチと音を立てそうなくらい多量の白濁粘液で膨れきっていた。下腹部の上げる悲鳴に、女は自分を犯す怪物へ向けて必死の形相で懇願する。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>